

幼児の 信仰教育に就いて

高 崎 能 樹



一、幼児の軽信性

幼児は、母の崇めるものを崇め、母の慕うものを慕い、母の仕えるものに仕え、母のひれふすもの前にひれふします。……そして崇拜対象は何であろうとかまいません。ですから母が迷信に凝っている幼児もその迷信になじみこんでしまいます。

こうした「軽信性」を本格的な正しい宗教心の養成に役立たしめることもできれば反対に幼稚な原始人の宗教形態に逆行させることも出来るのであります。

元来幼児は、その環境に順応する驚くべき力を持っています。それで幼児に期待することはそれより先きに環境に期待せねばなりません。もしも最悪の環境に置けば、野獣に等しいものに順応してしまいます。昔から日本の母親たちが言い伝えているように「ツの字の付くまで気をつけよ」ということは確実な真理で、教え歳の九ツまでに一生涯の生活型は決定してしまいます。

先頃世界の話題となつた『七才頃まで狼に育てられた人間の女兒を、後九年間孤児院に収容して、院長夫妻が懇切に育てて見

ても、全く狼の習性になじみ込んでいたものを、人間の生活に育て直すことは至難中の至難のことで、七年目によくやく四十五の言葉しか覚えなかつたし、また知能も能力も白痴の境を脱し得なかつた」という、印度であつた事実、(児童心理第三卷第九号に木田文夫博士が執筆紹介)は幼児期の環境の影響が如何に重大であるかを明示しております。

こういうわけで私は、幼児の信仰教育は第一に家庭環境の聖化が必要であり、それから社会環境(特に日曜学校及び幼稚園の宗教的雰囲気)が重大であり、更に豊富な宗教的文化財の中に育てることが、幼児をして自然に信仰を把握せしむる最もよい近道であると信じます。

幼児の軽信性……を認めるからには、それだけ責任をもつて幼児の環境から迷信や原始的宗教を退けねばなりません。……私は、あくまでも教育の最後の目的である、『人格の完成』を容易ならしむる力ある宗教を撰ぶべきであると信じます。そして、そのための絶対条件は「崇拜の対象が完全な人格的実在の神」でなければならぬことであります。

完全な人格の實在の神……とは、簡単に申しますと『全知全能至聖至愛の神で、私共と親しく交り得る神』のことで、基督教に於ては『主イエスキリスト』がそれであります。……無論基督教神学では『三位一体』という教理があつて『天地万物を統べ治め給う神の權威』と『人間の罪を贖い聖め給う犠牲愛のキリスト』と『常に信じ頼る者を導き助くる聖靈の力』とが一体となつてゐることを主張いたします。しかし私共はその全部をキリストの人格のうちに入れて『キリスト中心主義』で進むのであります。

従つて私共の信仰教育は『キリストを子供へ、子供をキリストへ』の標語を一筋道として進むことにいたします。

二、幼児の信仰教育

〔その一〕 幼児の被暗示性

嬰兒時代は肉体的暗示と云つて、正確、秩序、自己抑制などの長習慣を授乳と睡眠と運動を一定時間に正確に行うことによつて規律生活を身につけてやることができま

す。そして之が他日キリストの意志に服従する生活の土台になることは確かでありま

す。

けれども、宗教情操の教育にもつと大きな効果をもたらすものは、母親の祈りに燃ゆる語りかけや、嬰兒を抱いての主なる神に對する敬虔な態度のいのりでありませぬ。……無論嬰兒にその意味や内容は理解できません。けれども嬰兒の不思議な感性は母親の眞実な宗教感情を……また祝福心を悉く吸収いたします。

之を『被暗示性』と申しますが、幼児になるにそれが更に著しくついで、幼児の言行を左右するようになります。……故に幼児の信仰教育に、先ず第一に留意せねばならぬ点は、幼児の環境を信仰的な雰囲気にするのであります。

両親が家庭を神の宮として、毎朝礼拝を守り、家族のために祈り、隣人を愛し、勤勞を勉む、キリストの支配が家庭内にゆきめぐるようにすることでありませぬ。……結局、キリストを家長として、夫も妻も子供たちも皆、その家長に任せ、家長の守護と指導を受け「家徳」も「家風」もすべてキリストの精神を現わすようになることでありませぬ。

このように幼児の信仰教育は、家庭の信

仰的雰囲気第一義で、茲に重点が置かれなければ徹底いたしません。それで私は、『幼稚園の経営』を家庭と密着させ、且つ家庭の聖化に全力をそ、いで参りました。（實際私は幼稚園設立以来母性教育に全力をそ、いで参りましたが、その効果は著しいものがありました。）

次に社会的環境としての幼稚園に於ける努力点をも申しあげましょう。……ここでも矢張り第一に努力しなければならぬことは『信仰的雰囲気』をつくることでありませぬ。そして幼児の被暗示性による教育効果を求むることでありませぬ。

全職員が、キリストを中心として和をもつて結びつき、幼児保育の専き使命を自覚して必ず幼児の靈性を完うする熱意がなければなりません。……職員間に分裂があり憎み合いがあり、各自の勝手気まま、がありますと、必ず園児たちは安定感を失つていらつぎ出し、喧嘩が多くなつたり、怪我が多くなつたり、困る問題が頻発いたします。

不信仰な仲間、みな利己的で、競争意識のみ強く、軋轢が多く、虚栄虚飾で優越しようとのみあせり、偽隣と偽装とが巧み

になつて表面を繕うことに専念します……
そしてその雰囲気は幼児の仲間へ敬意を醸
成いたします。ですから楽しい協力的態度
は見られなくなります。神に対する宗教情
操の正しき現われである『敬虔』と『憧憬』
と『感謝』と『信頼』と『善意』とが職員
間であれば、生活を共にしている幼児たち
に対しても『尊敬と理解と感謝と信頼と愛
と親切』とが向けられます。……そして、
これ等が皆よき暗示となつて彼等を明朗に
向上させることとなります。

斯うした全体的な雰囲気、個々の教諭
の態度をも決定し、また更に個々の園児の
生活態度をも決定します。そして全体が一
団となつて『自信をもつて楽観的に努力す
る』という気風が生れて参ります。……こ
れだけでも私は、その幼稚園は成功である
と信じます。

〔その二〕 幼児の模倣性

『幼児は真似の天才である』といつた人
がありますが、全くその通りであります。
この模倣性は被暗示性と密接に結合してい
て、環境に順応する大きな力となります。
満三年頃は反射的模倣が盛んで、無意識に
何でもかでも真似ますが、その後はやゝ意

識的に楽しんで真似ごと遊びに没頭いたし
ます。『ごっこ遊び』が幼児の遊びの大部
分を占めるようになるのはこの為であります。
す。

猫の真似、犬の真似、鶏の真似のような
動物の生態をまねる遊びを初め、売り屋ご
っこ、銀行ごっこ、郵便局ごっこ、お祭り
のおみこしごっこに至るまで、社会的現象
をまねる模倣遊びが、幼児たちには盛んで
個人的にもまた仲間を組んでも巧みによく
遊びます。

けれども子供模倣に就て精しく研究し
た学者の報告によると、満三年児は百分の
八十五が大人の真似をして、子供が子供の
真似をするのが百分の十、動物の真似をする
のが百分の五であると報じ、満七年児は
大人の真似が八十、同じ子供の真似が十、
動物の真似が十と報じています。

このように幼児はむしろ大人のまね（特
に愛慕する大人のまね）を多くするのであ
りますから『示範的教育』が最も大切な役
割を果すことに注意せねばなりません。

この意味では、フレイベルの『母と子
の遊びの歌』から大きな教訓を学びます。
幼稚園の教諭も、むしろ母心に徹して、こ

の宗教的な美しい感覚に融けこんで、この
歌を子供たちと共に歌つたり、歌の構想を
小劇にして遊んだり、またごっこ遊びに活
用したりしたら、宗教情操の教育にどんな
に大きな効果もをたらす事かと期待してや
みません。

私共はよく、子供がお人形遊びをしてい
る場合に、子供はお人形のお母様になりす
まして（また先生にもなりすまして）子供
の幸福をキリストに祈つたり、また祈りの
しつけや、礼儀のしつけの為に懇切に教え
導いている姿を見て涙を催すことがあります。

また子供たち同志で、リスの家族ごっこ
をして、お母さんに「怪我して臥床してい
る愛児」を看護しています。お父さんは栄
養物をさがしに出かけます。兄さんはお薬
をいたゞきに病院にゆきます。お母さんは
静かに全快を祈りました。やがて多勢の小
鳥たちがお見舞に來て小りすの好きな歌を
歌つて慰めてくれます。夕方になつて小鳥
たちは帰つてしまします。最後にお父さん
も帰る兄さんも帰つて來て、みんな小リス
を困んで感謝のいのりをささげて夕ご飯を
いただきます。……で終りました。そこに

は終始一貫宗教雰囲気が充ちているのに私は驚きました。

〔その三〕 幼児の想像性

幼児が、自然に、思いのまゝに遊んでゐるのを観察したり、道を歩きながら語つてゐる奇想天外なお話を聞いたたりいたしますと、自由な束縛されない想像が、子供の生活の最も重要な位置を占めていることに気が付きます。

幼児は空想を恣にすることが特徴で、全くの小芸術家であります。そして私共大人を困惑させて少しも矛盾をも不都合をも感じないことすらあります。……ある時、園児（五才の女兒）が私に『わたしのうち三階よ。そしてピアノが三つあるのよ！好いでしよう』と真面目な顔で申しました。私は彼女の家を知っていますし、これは空想と真実との区別がつかなくなつたものと直ぐ気がきましたので『好いですねえ。それではお空の鳥たちを招いて音楽会をしましょう』と空想談の仲間入りをして更に音楽会の模様なども童話風に面白く語つた後『千代子さんが、お父様お母様をだいにじにしてあげると、お父様お母様が喜んで、今の一階のお家を三階にして、ピアノを三

つでも四つでも買つて下さるでしよう』と語つて、空想をよい願望に代えて楽しい夢をやぶらずに置きました。

この幼児の想像性を宗教的に伸ばして参りますと、幼児は目に見えぬキリストとも楽しく交つたり、また天国の花園にも遊んだり、神の喜び給う愛の人にもなつたり、聖い尊い人物にもなつたりいたします。

イング僧正の小さな娘のボウラが病死した時、その看病をした看護婦は『お伽噺の中に出てくる王女だと思ひ込んでゐる彼女の生活は、美しい想像の王女そつくりの生活であつた。そしてすべての者を愛し、どんな時も王女としての態度を失わなかつた断食の時も『私は王女様なんだから、ひもじいなんて思つてはならない』と語つた』と思ひ出を語つたということでありますが榮光の主になつてゐる幼児の想像は決して劣等感に捕われません。

〔その四〕 聖書の活用

幼児がお話を聴きたがることは非常なものであります。情操教育はよいお話を聞かせることによつて完うされる。……と申しても過言ではありません。

今一つ幼児期に発達した「語彙」の数が

将来の精神生活を決定する……ということも本当であり、それからまた「良き品性は宗教的また倫理的なお話によつて養われる」ということも本当であります。

こういう理解から私は『聖書のお話』に重点を置きます。そして最初に旧約聖書を三十三の主題に撰んで「神に対する信頼心と感謝心」とを養います。そして一主題を二回にでも三回にでも分けて語ることが出来ますから回数から見ると二倍にもなりましょう。それからキリストの物語を七十六回にわけて語ります。そしてキリストに対する愛慕とあこがれの心を強く養います。

宗教的文化財としても、これ程貴重なものは他にありません。そして私は毎年聖書のお話を「自分の信仰の告白」としていたしますが、三年保育の子供は卒業までに三回聞くことになり、そして彼等は皆「私たちのキリスト……否私のキリスト」にしてしまひます。

この他に私は「キリストとの個々の交り」として個々のいのりを育てることに努力いたしますが、それはまた他の機会に申述べることにいたします。

〔筆者 阿佐ヶ谷幼稚園長〕